

塔跡からみた国分僧寺の伽藍配置（上）

高 橋 巨

The layout of Kokubun-Sōji temple from the pagoda point of view (the first part)

Wataru TAKAHASHI

Abstract

This paper elucidates how the spatial arrangement of Kokubun-Sōji temples along the ancient Tōkaidō and Tōsandō highways underwent changes influenced by shifts in the ideological underpinnings of pagodas. Kokubun-Sōji temples were uniformly established throughout the nation in the mid-8th century by Emperor Shōmu's edict. However, the established Kokubun-Sōji temples exhibit layout characteristics in their spatial layouts rather than uniform. The factors contributing to this phenomenon remain largely unclarified. Consequently, within this discourse, the focus is directed towards temples along Tōkaidō and Tōsandō. Particularly, a detailed analysis of the pagoda structures has been conducted, elucidating the pivotal epochs at which the spatial arrangement of Kokubun-Sōji temples took form. Concretely, information pertaining to 65 relevant temples was gathered primarily from reports and related documents. Specifically, four analyses were undertaken, encompassing a foundation stone of pagoda, a platform of the pagoda's base, intercolumniations of the pagoda, and the visible area of the pagoda.

The construction of pagodas in Kokubun-Sōji temples along Tōkaidō and Tōsandō can be interpreted as having occurred under distinct ideological premises when compared to conventional practices. As a result, these pagodas subsequently exerted a significant influence on the spatial configuration of temple complexes. This phenomenon can be attributed to three key factors. First, an examination revealed that the foundation stone of the pagoda within Kokubun-Sōji temples lacked the customary function of enshrining Shari relics. Second, a revelation emerged regarding the standardization of the base platform design across pagodas within Kokubun-Sōji temples. Lastly, it became evident that while a correlation between the visible areas of the pagodas and the overall temple layout existed prior to the establishment of Kokubun-Sōji temples, this correlation was notably absent in the context of Kokubun-Sōji temples.

はじめに

大化元年（645年）の乙巳の変以降、日本では天皇中心の中央集権国家が確立していく。6世紀末に日本に流入した仏教は国家と結びつきを強め、藤原広嗣の乱（田村 1981）や天然痘の流行（辻 1919 など）、護国思想（吉田 2011）を背景に、天平 13 年（741）には所謂「国分寺建立の詔」（『続日本紀』天平 13 年 3 月乙巳の条）が發布され、全国に国分二寺（「金光明四天王護国之寺」「法華滅罪之寺」）が建立される。詔には、国分二寺を建立することや、七重塔を 1 基造ること、金光明最勝王経や妙法蓮華経を写経すること、僧を 20 人住まわせることなどが記される。このように、国分僧寺は国家の統一的な思想を基に発願される一方、実際に建立された国分僧寺は多様な伽藍配置である。本論では、この多様な伽藍が成立する背景に迫るべく塔跡に着目し、国分僧寺とそれ以前の伽藍の比較を行う。なお、東山道・東海道の分析を中心に行った本稿を（上）とし、

その他の地域を分析する論考を（下）として別の機会に投稿予定である。

「国分寺」という用語について、僧寺と尼寺を含めて「国分寺」と呼称し、僧寺単体についても「国分寺」と称することが通例である。しかし、本論では主に塔に焦点を当てる為、塔のある僧寺と塔のない尼寺の明確な区別が必要である。よって僧寺・尼寺を「国分僧寺」「国分尼寺」と表記し、僧寺と尼寺の両方を指す場合は「国分二寺」と表記する。

第1章 研究史と課題

第1節 伽藍配置の既往研究

戦前から今日まで連綿と続けられてきた古代寺院の伽藍配置研究は、膨大な蓄積がある。日本の伽藍配置研究は、南都七大寺やその他都城周辺の伽藍を分類することから始まった（高橋 1904a・1904b・1904c・1905・1907、石田 1929 など）。特に初期の研究は、現存する寺院が主な分析対象であったため、考古学だけでなく建築史学や美術史学の分野による議論が盛んであった（伊東 1912、足立 1933、田中 1944 など）。こうした黎明期の伽藍配置研究を経て、1950年には石田茂作が古代の伽藍配置について「四天王寺式」「法隆寺式」「法起寺式」「薬師寺式」「東大寺式」の5分類を用いてその概要をまとめている（石田 1950）。なお、1938年に角田文衛らによって全国の国分二寺が集成された（角田編 1938a・1938b）が、伽藍配置については「如何なる伽藍配置の様式にも包容することはできない」（角田 1938 p.198）と述べており、初期の研究では国分僧寺の分類に関する具体的な議論には至らなかった。

1950年代に日本が高度経済成長を迎えると全国各地で発掘調査が実施され、新たに多様な伽藍配置が明らかになった（奈良国立文化財研究所 1958・1960 など）。以降、増加する伽藍配置の分類とそれに基づく類型の再整理、発展に研究の主眼が移行していく（井内 1965、村田 1960・1970、太田 1979）。上原真人は、全国の発掘調査で明らかになった伽藍配置を整理するにあたって、従来の「〇〇寺式」といった塔と金堂の相対的位置関係に基づく分類とは異なる、回廊の閉じ方を基準とした分類法を提唱した。またこの分類を基に、日本古代の伽藍配置が金堂前面に空間を確保する方向で変遷していくことを指摘している。この指摘は、伽藍における塔と金堂の思想的背景の変化など、伽藍配置が変遷する背景に迫る視点として非常に重要である（上原 1986）。一方、国分僧寺の伽藍配置については、1959年に石田茂作が「国分寺伽藍は正に東大寺式というべきである。もっとも東大寺には二基の塔があり、国分寺の塔が一基であるのと異なるが、それは一基を略したと見る事が出来よう。」と述べ（石田 1959 pp.98-99）、国分僧寺の伽藍＝東大寺式伽藍配置という考え方が通説化していた。しかし、発掘事例の増加に伴って全国で東大寺式ではない国分僧寺の伽藍が多数見つかった（坂詰 1971）。なお、全国の国分僧寺については、角田文衛らによってその成果が集成されつつある状況であった（角田編 1986 など）。

1990年代に入ると伽藍配置研究は多様化し、さらに伽藍の研究は徐々に伽藍配置以外に主眼が移行する。文献史学の成果を援用しつつ伽藍配置の思想的背景を論じる研究（森 1991・1998・2006、菱田 2005）が進められる一方、近年では韓国や中国の発掘調査の活発化を受けて、韓半島や中国大陸の伽藍との比較を通して日本の伽藍配置を類型化しようと試みる研究も多く見られるようになる（清水 2006、佐川 2010・2020、小笠原 2011、三舟 2017、向井 2020 など）。また山路直充による伽藍の空間構成の議論や、梶原義実の寺院の選地と景観の研究など、従来の主要堂塔の研究から離れた論考も多く見られるようになる（山路 2011、梶原 2017）。2011年、佐藤信・須田勉らは全国の国分僧寺の思想や技術についてまとめた（佐藤・須田編 2011・2013）。須田は国分僧寺の伽藍配置について、塔が先行して造営される例があることや、塔が独立して塔院を形成することなどから、塔を重視する思想が現れているとしている（須田 2011・2016）。国分僧寺の伽藍配置については、これまでいくつか分類案が示されているがいずれも歴史的背景との関連が薄く、定着していない（有賀 2013、網 2014、須田 2020）。

近年、貞清世里によって観世音寺式伽藍配置や法起寺式伽藍配置の全国的な展開が整理されるなど（貞清・高倉 2010、貞清 2020a・2020b）、伽藍配置にも一定の焦点があたっているが、その一方で伽藍研究自体は伽藍配置以外に視点が移行しつつある。

第2節 論点の整理と課題

前節では、伽藍配置の既往研究を概観した。古代寺院は、戦前から様々な分野によって扱われてきたことから、多角的かつ膨大な研究の蓄積がある。特に、日本全国で国分僧寺を含む多くの古代寺院の伽藍の様相が判明していることは特筆すべき点である。ただ、741年に所謂「国分寺造営の詔」が発布され、全国一律で造営された国分僧寺が、多様な伽藍配置をもつ事の要因は未だ分かっていない。

伽藍配置研究は、現存の寺院を標識として類型化することから始まる。しかし、国分僧寺の伽藍配置は後に、発掘によって明らかになった事例が多い。そのうえ国分僧寺の伽藍配置が多様である為、従来の伽藍配置の視点では適切な類型化ができていない。日本古代寺院の展開において国分二寺の造営は大きな画期であったことは明らかであるにも関わらず、伽藍配置研究からそのパラダイムシフトは見いだせていない。

そこで、国分僧寺と国分僧寺以前の伽藍配置の比較を通して、国分僧寺伽藍の特徴や共通性を捉え、国分僧寺造営の画期を考古学的に見出すことが重要である。「国分寺建立の詔」には、「其造塔之寺、兼为国華。」とあり、国分僧寺における造塔の重要性が伺えるほか、須田勉は国分僧寺の伽藍について、塔が最も優先されて建立されたことを述べており、その重要性を説いている（須田 2011・2016）。既往研究では、伽藍における塔の重要性に着目して伽藍配置の変遷を論じたものもいくつか見られる（伊東 1893、長谷川 1925、宮本 1990）が、国分僧寺の塔に焦点を当てた論考は少ない。そこで、本稿は国分僧寺とそれ以前の寺院について「塔」の比較を行い、古代寺院の画期である国分僧寺の伽藍配置の成立背景についてその一端を明らかにする。具体的には造塔の背景や塔の具体的な構造を分析する。また武田和哉は、塔が伽藍の中心的存在とし、従来の伽藍配置や塔の研究史をまとめる中で、「仏塔が実際に造営されていた現場地理においてどのように視認され、また周辺地形の状況からどの範囲が眺望可能であったかなど、景観に及ぼした影響、すなわち塔というモニュメントを見る（見せられる）側への影響について、より具体的な検討が必要であると認識する。」（武田編 2022 p11）と述べている。以上から、本稿では塔のモニュメント性に着目した分析も実施する。

国分僧寺（特に七重塔）は、従来から「天皇権威の象徴」という特質が指摘されてきており、天皇権威を地域で表現することは、律令国家の地域支配という点で非常に重要であった（田村 1981、本郷 1997、須田 2011 など）。中村太一は、律令国家の領域において、特に国境である「辺」が重要視され、都城と「辺」を七道で結ぶことで国家の領域を示したと指摘している（中村 1996）ほか、吉村武彦は七道の整備と地域支配・再編が密接な関係を持つことを述べている（吉村 2017）。以上から、フロンティアたる東国と都城を結ぶ東山道・東海道に焦点を当てれば、国分僧寺の塔の思想的背景の一端を明らかにすることができると考え、本稿では東山道・東海道の古代寺院を対象に分析を行う。

第2章 分析視角

第1節 分析目的

塔の変遷から国分僧寺の伽藍配置の成立を解明するには、国分僧寺と国分僧寺以前の伽藍を比較し、①造塔の背景、②塔の規格、③伽藍における塔の平面的位置、がいかに異なるかを把握する必要がある。そこで本論では、以下の通り分析を行う。

①造塔の背景を解明するため、心礎の整理を行う。心礎は、舍利埋納や心柱に直接関連する遺構であり、塔の宗教的な意義と密接な関係にある。心礎の法量や心礎各部位を通時的に整理することによって、造塔意識の変化を考究する。

②塔基壇と、四天柱・側柱の柱間を整理する。基壇と柱間は、伽藍配置と間接的に関連する要素であり、この2つを整理することによって、塔の変遷や規格性を考究する。

③伽藍配置における塔の平面的位置の意義を解明するため、塔の可視領域の分析を行う。塔のモニュメント性（視認性）を分析し、伽藍配置と塔の平面的位置の関係性とその変化を見出す。なお本論で行う可視領域の分析は、伽藍配置（塔の位置）と塔の視認性の相関を考究するためのものであるため、選地や景観については言及しない。

第2節 分析対象

(1) 対象寺院の概要

本論は、第1章で述べたとおり、東山道・東海道の国分僧寺に着目する。またその成立背景や国分僧寺の伽藍の諸特徴を明らかにするため、当該地域の国分僧寺以前の古代寺院も含めた全65寺を対象とする(第1図)。

国分僧寺は、様相が明らかになっていない安房・志摩・出羽及び塔跡が発見されていない伊勢を除いた18国(東山道7国・東海道12国)を対象とする。なお近江国分僧寺については諸説ある(滋賀県教育委員会2009、畑中2010、小谷2012)が、本論では通説である紫香楽宮内裏野丘陵にある伽藍(甲賀寺)を近江国分僧寺として扱う。また駿河国分僧寺は長らく所在不明だったが、近年の調査成果から片山廃寺が駿河国分僧寺であることが判明した(静岡市教育委員会2016)ため、片山廃寺を駿河国分僧寺として扱う。

国分僧寺以前の古代寺院は、発掘調査などで伽藍配置・塔跡・心礎のいずれかの様相が明らかで47寺(東山道22寺・東海道24寺)を対象とする。このうち、穴太廃寺は2時期の伽藍が発見されているため、穴太廃寺(創建)と穴太廃寺(再建)に分け、異なる寺院として扱った。

(2) 対象寺院の伽藍配置と塔の位置

次に、分析対象のうち伽藍配置が明らかになっている寺院の塔の位置を整理する。

国分僧寺以前の伽藍配置は以下の7通りである。

①北野廃寺は、四天王寺式伽藍配置である。金堂の前面に塔が置かれ、両者が伽藍中軸線上に配置される。
 ②穴太廃寺(創建)、山王廃寺、龍角寺、東畑廃寺、穴太廃寺(再建)、美濃弥勒寺、寺本廃寺、天花寺廃寺、木下別所廃寺、杉崎廃寺、結城廃寺11寺は、法起寺式伽藍配置である。回廊内に金堂と塔が並置される伽藍配置で、塔は金堂の東に配置される。
 ③額田廃寺、茨城廃寺、九十九坊廃寺、借宿廃寺、大内廃寺、正家廃寺の6寺は法隆寺式伽藍配置である。法起寺式と左右対称で、回廊内に金堂と塔が並置される伽藍配置で、塔は金堂の西に配置される。
 ④南滋賀町廃寺は、川原寺式伽藍配置である。1塔2金堂式の伽藍配置で、金堂の前面西に西金堂、東に塔が並置される。
 ⑤夏井廃寺、郡山廃寺、多賀城廃寺の3寺は観世音寺式伽藍配置である。法起寺式と同様回廊内に金堂と塔が並置される伽藍配置で、塔は金堂の東に配置され、金堂は南北棟で配置される。
 ⑥その他、上記の5つの分類に当てはまらない特殊な伽藍配置が5寺ある。崇福寺は山中の尾根上に伽藍が位置し、塔跡の西に小金堂、北に弥勒堂と呼ばれる堂宇が配置されている。小金堂は南北棟である可能性があり、このことから川原寺式伽藍配置や観世音寺式伽藍配置の範疇にあることが推測されている(小笠原1989、貞清・高倉2010)。上植木廃寺は金堂と塔が回廊内に配置されるが、金堂は回廊内北寄りの伽藍中軸上、塔は金堂より南かつ伽藍中軸から西よりに配置される。台渡里廃寺は、金堂の東に塔が配置される法起寺式に類似した伽藍配置をとるが、中門が東に、講堂が金堂の南西に配置される。夏見廃寺も、金堂の東に塔が置かれる法起寺式に類似した伽藍配置だが、金堂前面西側に講堂が配置される。新治廃寺は、回廊内に金堂と塔が2基並列して配置される。
 ⑦また、金堂と塔が発見されているものの、伽藍配置は不明・不確定な寺院が5寺ある。衣川廃寺・法堂寺廃寺は、金堂前面のやや西寄りに塔が配置されている。寺領廃寺は、金堂の東に塔を並置する伽藍配置だが、初期の調査では金堂西側にも塔が配置されている双塔伽藍の可能性が指摘されている。しかし、その後発掘調査では確認できずその存在に疑問が呈されている(鈴木1989、安城市教育委員会2004)ため本論では、東塔のみを対象とする。宮井廃寺は、金堂前面西側に塔が配置される伽藍配置であり、竹林寺廃寺は金堂前面東側に塔が配置される伽藍配置である。

各国分僧寺の伽藍配置は、塔が回廊の中に位置するものと外に位置するもの、また金堂の西に位置するものと東に位置するものなど多様であり、既往研究でも分類案が提示されている(斎藤1972、上原1986、有賀2013、網2014、須田2020)が、統一的な分類は定まっていない。①甲斐国分僧寺、上総国分僧寺、美濃国分僧寺は、中門から派生した回廊が金堂にとりつき、伽藍中軸から東よりの回廊内に塔が配置され、「大官大寺式伽藍配置」とも呼称される。また伊豆国分僧寺、飛騨国分僧寺は回廊が検出されていないが、金堂と塔の位置関係及びその距離から同様の伽藍配置を想定している(伊豆国分僧寺は左右対称に塔が西に配置される)。

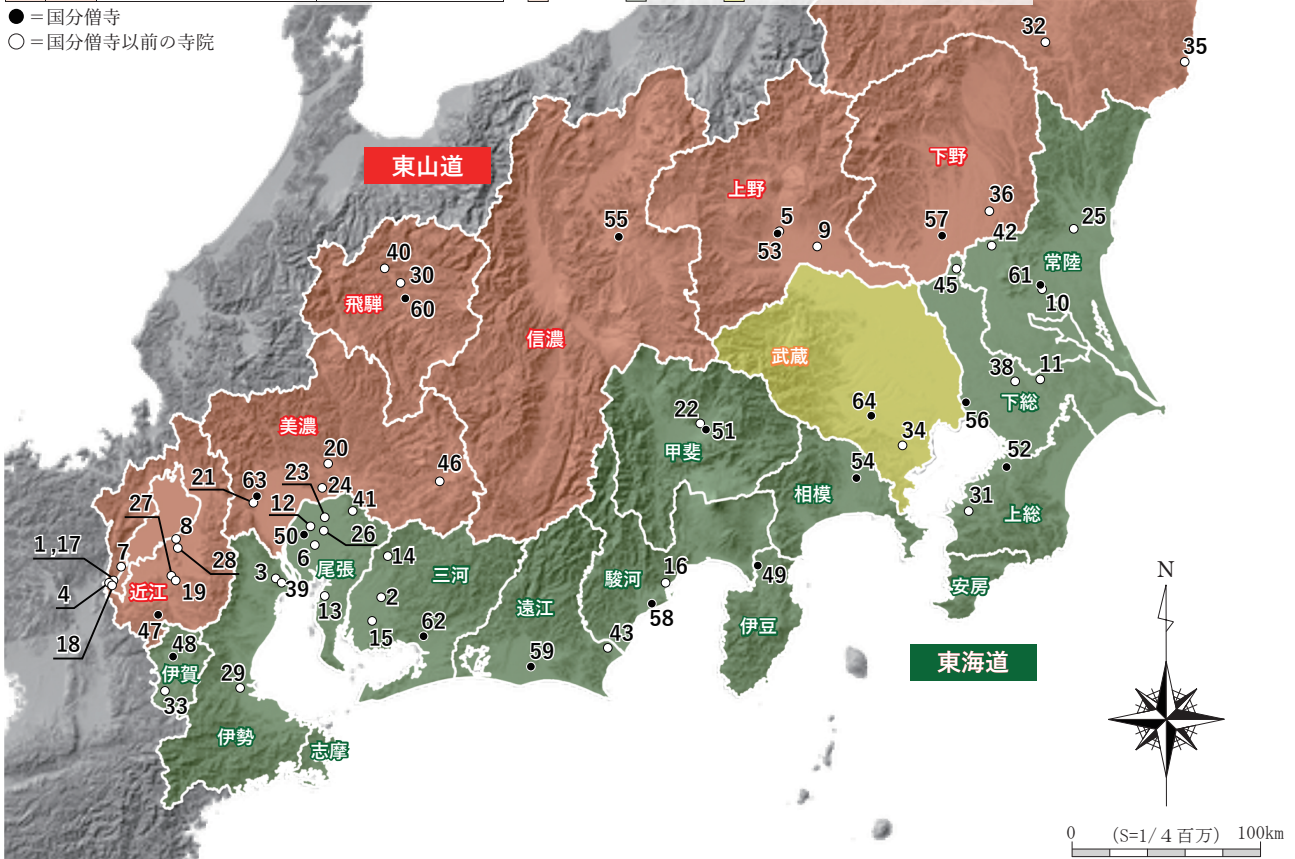
②相模国分僧寺は、回廊内に金堂と塔が並置される伽藍配置で、塔は金堂の西に配置される「法隆寺式伽藍配

塔跡からみた国分僧寺の伽藍配置（上）

No.	国名	寺院	創建年代
1	近江	穴太廃寺（創建）	7世紀第Ⅱ四半期
2	三河	北野廃寺	7世紀半ば
3	伊勢	額田廃寺	7世紀中葉
4	近江	崇福寺	668年
5	上野	山王廃寺	7世紀第Ⅲ四半期
6	尾張	碓目寺	7世紀第Ⅲ四半期
7	近江	衣川廃寺	7世紀第Ⅲ四半期
8	近江	普光寺廃寺	7世紀第Ⅲ四半期
9	上野	上植木廃寺	7世紀後半
10	常陸	茨城廃寺	7世紀後半
11	下総	龍角寺	7世紀後半
12	尾張	東畑廃寺	7世紀後半
13	尾張	法海寺	7世紀後半
14	三河	舞木廃寺	7世紀後半
15	三河	寺領廃寺	7世紀後半
16	駿河	尾羽廃寺	7世紀後半
17	近江	穴太廃寺（再建）	7世紀後半
18	近江	南滋賀町廃寺	7世紀後半
19	近江	宮井廃寺	7世紀後半
20	美濃	美濃弥勒寺廃寺	7世紀後半
21	美濃	宮代廃寺	7世紀後半
22	甲斐	寺本廃寺	7世紀第Ⅲ～Ⅳ四半期
23	尾張	長福寺廃寺	7世紀第Ⅲ～Ⅳ四半期
24	美濃	美濃山田寺	7世紀第Ⅲ～Ⅳ四半期
25	常陸	台渡里廃寺	7世紀第Ⅲ四半期
26	尾張	尾張弥勒寺廃寺	7世紀第Ⅲ四半期
27	近江	雪野寺	7世紀第Ⅲ四半期
28	近江	法堂寺廃寺	7世紀第Ⅲ四半期
29	伊勢	天花寺廃寺	7世紀後葉
30	飛騨	石橋廃寺	7世紀後葉
31	上総	九十九坊廃寺	7世紀末
32	陸奥	借宿廃寺	7世紀末
33	陸奥	夏見廃寺	7世紀末

No.	国名	寺院	創建年代
34	武蔵	影向寺	7世紀末～8世紀初頭
35	陸奥	夏井廃寺	7世紀末～8世紀初頭
36	下野	大内廃寺	7世紀末～8世紀初頭
37	陸奥	郡山廃寺	7世紀末～8世紀初頭
38	下総	木下別所廃寺	7世紀末～8世紀初頭
39	伊勢	繩生廃寺	7世紀末～8世紀初頭
40	飛騨	杉崎廃寺	7世紀末～8世紀初頭
41	尾張	大山廃寺	7世紀末～8世紀初頭
42	常陸	新治廃寺	8世紀初頭
43	遠江	竹林寺廃寺	8世紀初頭
44	陸奥	多賀城廃寺	8世紀第Ⅰ四半期
45	下総	結城廃寺	8世紀第Ⅰ四半期
46	美濃	正家廃寺	8世紀中ごろ
47	近江	内裏野丘陵伽藍（甲賀寺）	8世紀中ごろ
48	伊賀	伊賀国分僧寺	741年
49	伊豆	伊豆国分僧寺	741年
50	尾張	尾張国分僧寺	741年
51	甲斐	甲斐国分僧寺	741年
52	上総	上総国分僧寺	741年
53	上野	上野国分僧寺	741年
54	相模	相模国分僧寺	741年
55	信濃	信濃国分僧寺	741年
56	下総	下総国分僧寺	741年
57	下野	下野国分僧寺	741年
58	駿河	片山廃寺（駿河国分僧寺）	741年
59	遠江	遠江国分僧寺	741年
60	飛騨	飛騨国分僧寺	741年
61	常陸	常陸国分僧寺	741年
62	三河	三河国分僧寺	741年
63	美濃	美濃国分僧寺	741年
64	武蔵	武蔵国分僧寺	741年
65	陸奥	陸奥国分僧寺	741年

● = 国分僧寺
○ = 国分僧寺以前の寺院



第1図 本論の対象寺院の位置

置」をとる。下総国分僧寺は回廊が見つかっていないが、同様の伽藍配置と考えられる。③その他の国分僧寺は回廊外に塔が置かれる伽藍配置で、塔の位置についてはそれぞれ、伊賀国分僧寺、尾張国分僧寺、信濃国分僧寺、下野国分僧寺、片山廃寺、常陸国分僧寺、武蔵国分僧寺は金堂の南東、上野国分僧寺は金堂の真西、内裏野丘陵伽藍、陸奥国分僧寺は金堂の真東、遠江国分僧寺、三河国分僧寺は金堂の南東に配置される。なお、第4章で詳細を述べるが、国分僧寺以前の伽藍配置と国分僧寺の伽藍配置では成立背景が異なるため、国分僧寺の伽藍配置についてはかぎ括弧を付けて「大官大寺式伽藍配置」、「法隆寺式伽藍配置」と表記する。

第3章 古代東国の塔跡

第1節 心礎各部位の変遷

(1) 分析の方法

本節では第2章で記述した分析対象のうち、22個の心礎を対象とする。対象の心礎について、既往報告を基に心礎の石材や法量を整理し、おおよその創建年代順に第1表にまとめた。

分析に際し、まず各部の機能・用途が推測できる心礎について述べる。心礎は単なる礎石ではなく、心柱を支える「柱座」、心柱を固定する「柄」、鎮壇具を埋納する「舍利孔」などの機能を有し、機能に応じて心礎上面に凹凸を設ける。しかし、これら全ての機能を有する心礎は少なく、心礎に残された各部位が具体的にどの機能を有するものかは判別し難い。そこで、機能が推定できる以下の事例を基に、その直径から各部位を3分類した。

宮井廃寺、弥勒寺廃寺、法堂寺廃寺の各心礎は3段の穴が穿たれているため、上記の3つの部位を全て有していると推定出来る。一番外側の穴は柱座と考えられ、順に直径1.14m、0.92m、0.90mを測る。中間の穴は柄穴と考えられ、順に0.71m、0.79m、0.67mを測る。一番内側の穴は舍利孔と考えられ、順に0.09m、0.11m、0.08mを測る。山王廃寺では、心礎と同じ輝石安山岩製の蓮華型根巻石が出土しており、心柱の根元を囲うように置かれたと考えられている。この根巻石の内径は0.98mを測り、心柱は根元で1m弱の太さを持っていたことが推測できる。心礎に穿たれた穴は直径0.66mであり、推定される心柱直径より30cm～40cmほど細い。一方、穴の周囲にめぐらされた環状溝は直径1.02mであり、根巻石の内径と近似値を示す。このことから、山王廃寺の心礎は環状溝によって柱座のような突出部を造り出していると考えられ、心礎に穿たれた2段の穴はそれぞれ、柄孔・舍利孔と考えられる。崇福寺、美濃山田寺、繩生廃寺では心礎から鎮壇具が出土しており、それぞれの穴は舍利孔であることが確実である。直径はそれぞれ順に0.20m、0.16m、0.14～0.15mである。また、結城廃寺心礎は、3段の穴が穿たれており、発掘調査の際に中段の穴には蓮華が描かれた花崗岩製の石蓋が嵌った状態で検出された。このことから、中段の0.24mの穴は蓋受孔であり、最も内側の0.17mの穴は舍利孔、外側の0.90m穴は柄穴か柱座と考えられる。

以上から、心礎の各部位を(A)径が0.8m以上のもの、(B)径が0.3m以上0.8m未満のもの、(C)径が0.3m未満のもの3つに分類し第2表にまとめた。なお、この3分類は目安であり、直接機能と結びつくものではない。また、心礎の規模を整理するため、報告書図面を用いて面積を算出し、おおよその創建年代順に棒グラフで示した(第2図)。

(2) 心礎の分析

まず、心礎の各部位について述べる。

(A)は、宮井廃寺、美濃弥勒寺廃寺、法堂寺廃寺の柱座、山王廃寺の環状溝によって作出された凸状の柱座を基準に設定した。(A)は通時的にみられるが、国分僧寺では全て凸部なのに対し、国分僧寺以前では山王廃寺以外全て凹部(穴)である。また、(A)を持つ心礎は南滋賀町廃寺、杉崎廃寺を除いて全て2.0m²以上の平面規模を持つ。

(B)は、山王廃寺、宮井廃寺、美濃弥勒寺廃寺、法堂寺廃寺の柄穴を基準に設定した。崇福寺から通時的に見られ、この規模の構造をもつ心礎は(A)よりも多く見られる。ただし、繩生廃寺では心礎上面に根巻粘土が検出されたが、そこから推定される心柱径は0.6～0.7mである(朝日町教育委員会1988)ほか、寺本廃

第1表 対象心礎の属性一覧

国名	寺院	石材	長径/短径	位置	溝
三河	北野廃寺	花崗岩	2.70/1.95	地下式	放射状溝
近江	崇福寺	花崗岩	約1.82/1.52	半地下式	—
上野	山王廃寺	輝石安山岩	2.70/2.50	地下式	環状溝放射状溝
尾張	甚目寺	砂岩	1.96/1.01	—	放射状溝
近江	普光寺廃寺	流紋岩	2.20/2.37	地上式?	環状放射状溝
上野	上植木廃寺	花崗岩	1.31/1.05	—	—
下総	龍角寺	花崗岩	2.50/1.80	地上式?	放射状溝
尾張	法海寺	花崗岩	1.30/0.81	—	放射状溝
三河	舞木廃寺	花崗岩	1.56/1.80	—	環状溝
三河	寺領廃寺	—	1.3以上/1.5以上	—	—
駿河	尾羽廃寺	砂岩	1.11/0.85	—	—
近江	南滋賀町廃寺	花崗岩	1.82/1.52	地上式?	—
近江	宮井廃寺	花崗岩	2.16/1.69	地下式?	—
美濃	美濃弥勒寺廃寺	—	1.97/1.73	—	—
美濃	宮代廃寺	花崗岩	2.40/1.60	地上式	—
甲斐	寺本廃寺	安山岩	2.81/2.39	地上式	放射状溝
尾張	長福寺廃寺	花崗岩	2.58/1.82	—	—
美濃	美濃山田寺	硬質砂岩	1.50/1.25	—	—
尾張	尾張弥勒寺廃寺	砂岩	1.40/0.95	—	—
近江	法堂寺廃寺	流紋岩	2.15/1.55	—	—
飛騨	石橋廃寺	花崗岩	1.47/1.00	—	—
上総	九十九坊廃寺	凝灰質砂岩	1.85/0.98	地上式	—

国名	寺院	石材	長径/短径	位置	溝
陸奥	夏見廃寺	花崗岩	1.38/1.03	地上式	—
武蔵	影向寺	花崗岩	1.80/1.50	地上式?	—
下野	大内廃寺	—	1.50/0.95	地上式	—
伊勢	繩生廃寺	花崗岩	1.80/1.20	地下式	—
飛騨	杉崎廃寺	花崗岩	1.30/0.97	—	環状放射状溝
尾張	大山廃寺	斑状花崗岩	1.50/1.10	地上式?	環状溝
常陸	新治廃寺 (東塔)	花崗岩	1.67/1.36	地上式	—
陸奥	多賀城廃寺	安山岩	2.60/1.55	地上式	—
下総	結城廃寺	花崗岩	1.95/1.60	地下式	—
美濃	正家廃寺	花崗岩	約1.60/1.50	地上式	—
尾張	尾張国分僧寺	砂岩	1.88/1.50	地上式	—
甲斐	甲斐国分僧寺	—	2.72/2.25	地上式	—
上総	上総国分僧寺	凝灰質砂岩	1.76/1.76	地上式	—
上野	上野国分僧寺	輝石安山岩	2.61/2.44	地上式	—
相模	相模国分僧寺 (亡失)	—	径2.40	—	—
下野	下野国分僧寺	凝灰岩	2.40/2.10	地上式	—
遠江	遠江国分僧寺	凝灰岩質 細礫岩	2.10/1.80	地上式	—
飛騨	飛騨国分僧寺	花崗岩	約1.82	—	—
常陸	常陸国分僧寺	花崗岩	2.20/2.02	—	—
美濃	美濃国分僧寺	花崗岩	3.20/2.38	地上式	—
武蔵	武蔵国分僧寺 (塔1)	安山岩	2.12/1.36	地上式	—
陸奥	陸奥国分僧寺	玄武岩質 安山岩	2.18/1.91	地上式	—

※単位は全て m。
 ※既往報告中で尺寸表記だったものは 3.03 をかけてメートル表記に修正。
 ※小数第 3 位以下は四捨五入して表記。

寺では白磁の丸玉と石英が出土しており、報告書では舍利埋納物とされている（春日居町教育委員会 1988）。こうした事例もあるため、(B) は柱座か柄穴か舍利孔かは判断できない。なお、上総国分僧寺や上野国分僧寺の心礎は、同様の規模の凸部を設けている。穴の深さは、国分僧寺以前では 0.1m に満たないものから 0.3m 近いものまで混在するが、各国分僧寺では 0.2m を越える。

(C) は、崇福寺、山王廃寺、宮井廃寺、美濃弥勒寺廃寺、美濃山田寺、法堂寺、繩生廃寺、の舍利孔、及び結城廃寺の蓋受孔、舍利孔を基準に設定した。(A) とほぼ同数みられるが国分僧寺は相模国分僧寺を除いては存在しておらず、国分僧寺以前に集中する。規模や構造から、凹状の柱座とは考え難く、舍利孔か柄穴のいずれかだといえる。この部位は、山王廃寺の舍利孔が深さ 0.30m であるが、そのほかの深さは 0.20m に満たない（結城廃寺は蓋受孔を含めて 0.14m）。

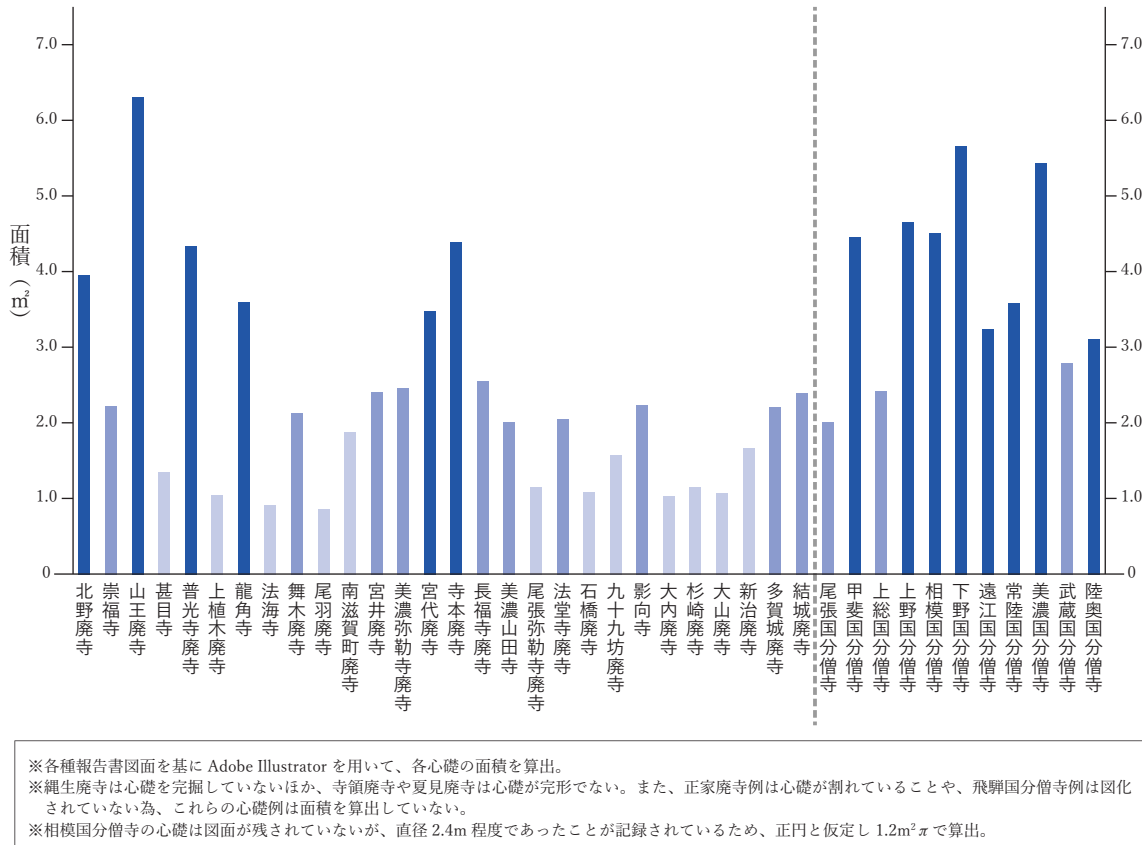
次に、心礎石材の平面規模をみると、7 世紀には面積が 3m² を越える大規模の心礎がある一方、1m² 程度の小規模な心礎が見られる。こうした小規模な心礎は、7 世紀末～8 世紀初頭にもみられるが 3m² を超える心礎は見られない。741 年発願とされる各国分僧寺では、全体的に長径・短径共に 2m を超え、面積も 2m² を超える規模の心礎が多い傾向にあり、2m² 未満の小規模な心礎はない。

第2表 心礎各部位の規模と分類

寺院	(A) 直径0.8m以上	(B) 直径0.8m未満・0.3m以上		(C) 直径0.3未満
北野庵寺	穴 直径0.84m・深さ0.07m	-		-
崇福寺	-	穴 直径0.53m・深さ0.10m	舍利孔 0.18m~0.20m・奥行0.27m	
山王庵寺	環状溝柱礎 直径1.14m・高さ0.05m	納穴 直径0.66m・深さ0.18m	舍利孔 直径0.26m・深さ0.30m	
甚目寺	-	外穴 直径0.79m・深さ0.15m	内穴 直径0.21m・深さ0.06m	
普光寺庵寺	穴 直径0.82~0.85m・深さ0.13m	-		-
上植木庵寺	-	凸部 直径0.74m・高さ0.02m	穴 直径0.22m・深さ0.14m	
龍角寺	外穴 直径0.82m・深さ0.03m	内穴 直径0.67・深さ0.12m		-
法海寺	-	外穴 直径0.73m・深さ0.07m	内穴 直径0.45m・深さ0.12m	-
舞木庵寺	外穴 直径0.86m・深さ0.10m	凸部 直径0.54m・高さ0.10m		内穴 直径0.14m・深さ0.04m
寺領庵寺	-	穴 直径0.54m・深さ0.03m		-
尾羽庵寺	-	穴 直径0.34m・深さ0.11m		-
南遊賀町庵寺	外穴 直径0.83m・深さ0.11m	-		内穴 直径0.21m・深さ0.18m
宮井庵寺	柱礎 直径1.14m・深さ0.05m	納穴 直径0.71m・深さ0.09m	舍利孔 直径0.18m・深さ0.09m	
美濃弥勒寺庵寺	柱礎 直径0.92m・深さ0.02m	納穴 直径0.79m・深さ0.02m	舍利孔 直径0.14m・深さ0.11m	
宮代庵寺	-	穴 直径0.65m・深さ0.09m		-
寺本庵寺	外穴 直径0.98m・深さ0.03m	内穴 直径0.62m・深さ0.17m		-
長福寺庵寺	穴 直径0.88m・深さ0.06m	-		-
美濃山田寺	穴 直径0.85m・深さ0.04~0.07m	-		舍利孔 直径0.16m・深さ0.15m
尾張弥勒寺庵寺	-	-		-
法堂寺庵寺	柱礎 直径0.90m・深さ0.03m	納穴 直径0.67m・深さ0.14m	舍利孔 直径0.14m・深さ0.08m	
石橋庵寺	-	-		穴 直径0.27m・0.10m
九十九坊庵寺	-	穴 直径0.50m・深さ0.27m		-
夏見庵寺	-	穴 直径0.30m・深さ0.15m		-
影向寺	-	-		穴1 直径0.22m・深さ0.12m 穴2 直径0.15m・深さ0.10m
大内庵寺	-	-		穴 直径0.18m・深さ0.11m
繩生庵寺	-	-		舍利孔 直径0.14~0.15m・深さ0.14m
杉崎庵寺	外穴 直径0.80m・深さ-	凸部 直径0.70m・高さ-	内穴 直径0.33m・深さ0.10m	-
大山庵寺	-	穴 直径0.77m・深さ0.05m	凸部 0.51m・高さ0.06m	-
新治庵寺(東塔)	-	穴 直径0.55m・深さ0.22m		-
多賀城庵寺	-	穴 直径0.59m・深さ0.09m		-
結城庵寺	外穴 直径0.90m・深さ0.04m	-		蓋受穴 直径0.24m・深さ0.04m 舍利孔 直径0.17m・深さ0.10m
正家庵寺	-	穴 直径0.72m・深さ0.08m		-
尾張国分僧寺	-	凸部 直径0.35m・高さ-		-
甲斐国分僧寺	凸部 直径1.25m・高さ-	穴 直径0.50m・深さ0.28m		-
上総国分僧寺	-	凸部 直径0.33m・高さ0.15m		-
上野国分僧寺	-	凸部 直径0.66m・高さ-		-
相模国分僧寺(亡失)	凸部 直径0.91m・高さ0.46m	-		穴 直径0.18m・-
下野国分僧寺	-	-		-
遠江国分僧寺	凸部 直径1.70m・高さ0.09m	穴 0.50m/深さ-		-
飛騨国分僧寺	凸部 直径1.36m・高さ0.01m	穴 直径0.59m・深さ0.28m		-
常陸国分僧寺	-	穴 直径0.49m・深さ0.20m		-
美濃国分僧寺	-	凸部 直径0.64m・高さ0.12m		-
武蔵国分僧寺(塔1)	-	穴 直径0.73m・深さ0.45m		-
陸奥国分僧寺	-	穴 直径0.55m・深さ0.23m		-

※単位は全て m。/※既往報告中で尺寸表記だったものは 3.03 をかけてメートル表記に修正。/※小数第 3 位以下は四捨五入して表記。
 ※心礎部位のうち凹に該当するものは全て「穴」と表記し、複数あるものは外側から順に「外穴」・「中穴」・「内穴」と表記した。
 ※心礎部位のうち凸に該当するものは全て「凸部」と表記した。/※心礎部位のうち用途が想定できるものは、用途に即した部位名称で表記した。

塔跡からみた国分僧寺の伽藍配置（上）



第2図 対象心礎の規模

(3) 小結

(C) の分析から、舍利孔は深さは 0.20m に満たない傾向にあることが分かる。一方、(B) は国分僧寺以前ではさまざまな深さが混在しているが、国分僧寺は全て深さが 0.20m 以上である。つまり、(B) は国分僧寺以前で舍利孔的な様相を含んでるものもあるが、国分僧寺ではそれが失われ、下野国分僧寺のような凹凸を持たない心礎や上総国分僧寺・上野国分寺などの出柵をもつ心礎が現れると推察できる。また (A) においても、国分僧寺以前では凹状であったのが国分僧寺では凸状になっている。つまり、古代の心礎は国分僧寺を境に舍利孔を失い、柄穴や凸状の柱座などに重点が置かれるようになり、形は簡素化すると考えられる。

第2節 塔基壇・柱間の規模と規格

(1) 分析の方法

本節では、第2章で挙げた対象寺院のうち塔基壇（地業）の規模、柱配置のいずれかがある程度解明されている 52 寺院を対象に分析を行う。具体的には、塔基壇の平面規模及び柱総間、四天柱・側柱の各柱間、基壇化粧などを整理する。既往報告などを基に、塔基壇・柱間についてまとめたものを第3表に、各基壇のサイズの棒グラフを第3図にそれぞれおおよその創建年代順に示した。なお、柱間は全て3間×3間である。また、基壇規模や柱間については、天平尺 0.295m、高麗尺 0.356m（各尺長については、年代などによって多少の増減があるがここでは一律前述の数値を使用した）の近似値を計算しそれぞれ「天」・「高」で表記した。

(2) 塔基壇・柱間の分析

基壇外装については、国分僧寺でいくつか切石積基壇が見られるほか、崇福寺や多賀城廃寺など国家的色彩の強い寺院で見られる。

塔基壇は国分僧寺以前では、一辺が 11m 前後の規模のものが多数を占め、全体を通して、基壇一辺 8.1m ~ 13.8m である。対して、各国分僧寺では尾張国分僧寺を除いて、基壇の一辺が 16.5m ~ 19.5m と格段に大き

第3表 塔基壇・柱間の規模と分類

国名	寺院	基壇化粧	基壇(地盤)一辺	総間	各柱間
近江	穴太庵寺(創建)	—	10.2m	—	—
三河	北野庵寺	—	11.35m	—	—
伊勢	額田庵寺	—	11.0m	—	—
近江	崇福寺	切石積	—	6.24m(天21尺/高18尺)	2.12m(天7尺/高6尺)等間
上野	山王庵寺	—	13.6m	—	—
尾張	眞直寺	—	—	—	—
近江	衣川庵寺	—	9.0m	—	—
近江	普光寺庵寺	—	—	—	—
上野	上植木庵寺	石積	8.5m	—	—
常陸	茨城庵寺	石積	11.5~12.2m	—	—
下総	龍角寺	—	11.9m	—	—
尾張	東畑庵寺	—	9.0~10.0m	—	—
尾張	法海寺	—	—	—	—
三河	舞木庵寺	—	—	—	—
三河	寺領庵寺	—	13.8m	7.2m(天24尺/高20尺)	2.4m(天8尺/高7尺)等間
駿河	尾羽庵寺	—	—	—	—
近江	穴太庵寺(再建)	瓦積	13.3m	—	—
近江	南滋賀町庵寺	—	12.1m	—	—
近江	宮升庵寺	乱石積	12.75m	6.75m(天23尺/高19尺)	2.25m(天8尺/高6尺)等間
美濃	美濃弥勒寺庵寺	—	11.5m	6.36m(天21尺/高18尺)	2.09m(天7尺/高6尺)等間
美濃	宮代庵寺	瓦積	12.0m	—	—
甲斐	寺本庵寺	乱石積	11.5m	5.40m(天18尺/高15尺)	中央間2.40m・脇間1.50m 1.80m(天6尺/高5尺)等間
尾張	長福寺庵寺	—	—	—	—
美濃	美濃山田寺	—	—	—	—
常陸	台渡里庵寺	—	10.0~11.0m	—	—
尾張	尾張弥勒寺庵寺	—	—	—	—
近江	雪野寺跡	—	13.8m	—	—
近江	法堂寺庵寺	—	—	—	—
伊勢	天花寺庵寺	—	11.0m	—	—
飛騨	石橋庵寺	—	—	—	—
上総	九十九坊庵寺	—	—	5.40m(天18尺/高15尺)	1.80m(天6尺/高5尺)等間
陸奥	借宿庵寺	木製	9.6m	—	—
陸奥	夏見庵寺	河原石積	11.25m	5.3m(天18尺/高15尺)	1.77m(天6尺/高5尺)等間
武蔵	影向寺	—	—	—	—
陸奥	夏井庵寺	—	—	5.85~6.09m(天20尺/高17尺)	1.95~2.03m(天7尺/高6尺)等間
下野	大内庵寺	—	—	5.49m(天18尺/高15尺)	1.83m(天6尺/高5尺)等間
陸奥	郡山庵寺	—	—	—	—
下総	木下別所庵寺	—	8.7m	—	—
伊勢	繩生庵寺	瓦積	10.0~10.2m	5.4m(天18尺/高15尺)	1.8m(天6尺/高5尺)等間
飛騨	杉崎庵寺	乱石積	8.1m	4.2m(天14尺/高12尺)	中央間1.5m・脇間1.35m 1.4m(天5尺/高4尺)等間
尾張	大山庵寺	—	—	7.2m(天24尺/高20尺)	2.4m(天8尺/高7尺)等間
常陸	新治庵寺(東塔)	塙積	12.0m	—	—
常陸	新治庵寺(西塔)	塙積	12.0m	5.28m(天18尺/高15尺)	1.76m(天6尺/高5尺)等間
遠江	竹林寺庵寺	—	9.0m	6.8m(天23尺/高19尺)	中央間2.4m(天8尺/高7尺)・脇間2.1m(天7尺/高6尺)
陸奥	多賀城庵寺	切石積	11.0~11.2m	6.24m(天21尺/高18尺)	2.08m(天7尺/高6尺)等間
下総	結城庵寺	—	9.0~10.0m	—	—
美濃	正家庵寺	乱石積	10.2m	6.0m(天20尺/高17尺)	中央間2.1m・脇間1.95m 2.0m(天7尺/高6尺)等間
近江	内裏野丘庵伽藍(甲賀寺)	—	—	9.09m(天30尺)	3.03m(天10尺)等間
伊賀	伊賀国分僧寺	—	—	10.69m(天36尺)	3.56m(天12尺)等間
伊豆	伊豆国分僧寺	—	18.0m(天61尺)	—	—
尾張	尾張国分僧寺	瓦積	14.5~14.7m(天49尺)	—	—
甲斐	甲斐国分僧寺	乱石積	16.6m(天56尺)	9.81m(天33尺)	3.27m(天11尺)等間
上総	上総国分僧寺	瓦積	16.6m(天56尺)	10.65m(天36尺)	3.55m(天12尺)等間
上野	上野国分僧寺	切石積	19.2m(天65尺)	10.80m(天36尺)	3.60m(天12尺)等間
相模	相模国分僧寺	切石積	19.5m(天65尺)	10.71m(天36尺)	3.57m(天12尺)等間
信濃	信濃国分僧寺	—	13.2m(天45尺)	7.8(天26尺)	中央間3.0m・脇間2.4m 2.60m(天9尺)等間
下総	下総国分僧寺	—	17.5m(天59尺)	—	—
下野	下野国分僧寺	切石積	16.8m(天57尺)	10.80m(天36尺)	3.60m(天12尺)等間
駿河	片山庵寺(駿河国分僧寺)	木製	16.5m(天56尺)	—	—
遠江	遠江国分僧寺	木葺	18.0m(天61尺)	9.6m(天33尺)	3.2m(天11尺)等間
飛騨	飛騨国分僧寺	—	—	—	—
常陸	常陸国分僧寺	—	15以上	—	—
三河	三河国分僧寺	木製	16.8m(天57尺)	9.0m(天30尺)	3.0m(天10尺)等間
美濃	美濃国分僧寺	塙積	19~19.2m(天65尺)	—	—
武蔵	武蔵国分僧寺	乱石積	17.7m(天60尺)	10.00~10.65m(天36尺)	中央間3.52m・脇間3.24m 3.45~3.55m(天12尺)等間
陸奥	陸奥国分僧寺	切石積	16.6~17.1m(天56~58尺)	9.81m(天33尺)	3.27m(天11尺)等間

※各報告書記載情報を基に記載。／※総間、柱間、国分僧寺の基壇1辺を規模で分類。

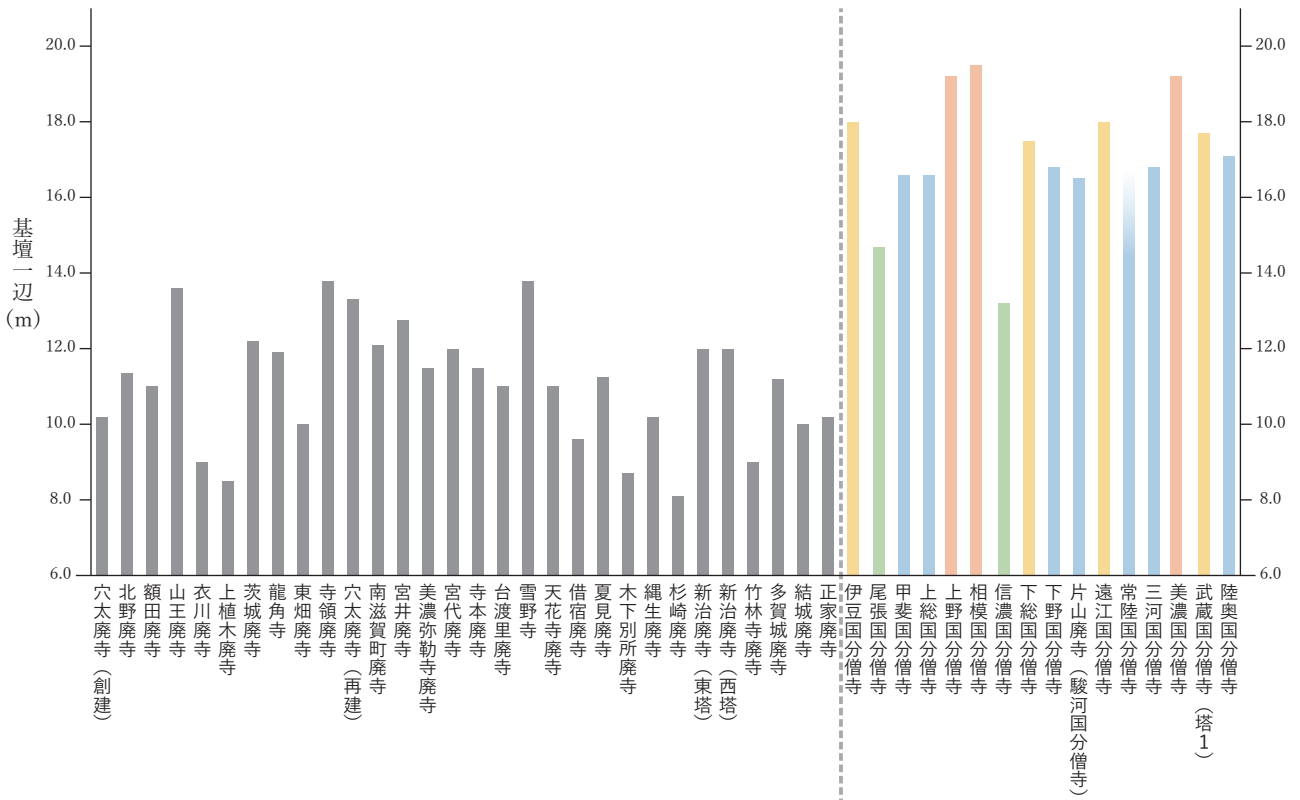
※各尺長について諸説あるが、天平尺0.295m・高麗尺0.356mとして近似値を「天」「高」で表記(国分僧寺は天平尺のみ表記)。

くなる。また、国分僧寺以前は塔基壇の平面規模に傾向が見られないのに対し、国分僧寺の塔基壇は一辺が①16.6m~17.1m(天57尺前後)、②17.5m~18.0m(天60尺前後)、③19.0m~19.5m(天65尺前後)、④その他、の4つに分類できる。

柱間配置については、国分僧寺以前では総間6m前後、各柱間2m前後(天6~8尺/高5~7尺)のものが多く占め、最大でも総間7.2m程度(天24尺/高20尺)であり、ある程度の規格性が見て取れる。一方国分僧寺では、総間9.0m~10.8mと格段に大きくなる。また柱間規模も①9.0m~9.09m(天30尺)、②9.6m~9.81m(天33尺)前後、③10.65m~10.80m(天36尺)の3つに分類できる。

(3) 小結

以上を踏まえると、次のことが言える。①国分僧寺の塔基壇の平面規模・柱総間は、それ以前と比べて格段に大きくなる。②国分僧寺以前は基壇の規模に統一性が見られないが、国分僧寺では規格性がみてとれる。③柱間は7世紀~国分僧寺まで、一定の規格性がみてとれる。④国分僧寺の基壇は、切石積基壇が多い。



第3図 基壇一辺の長さ

第3節 塔跡の可視領域と伽藍配置

(1) 分析の方法

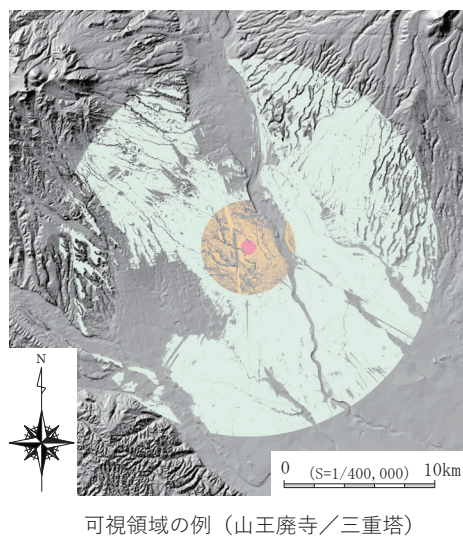
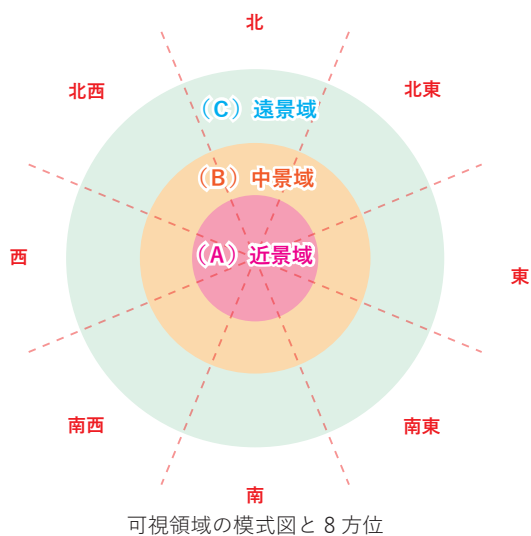
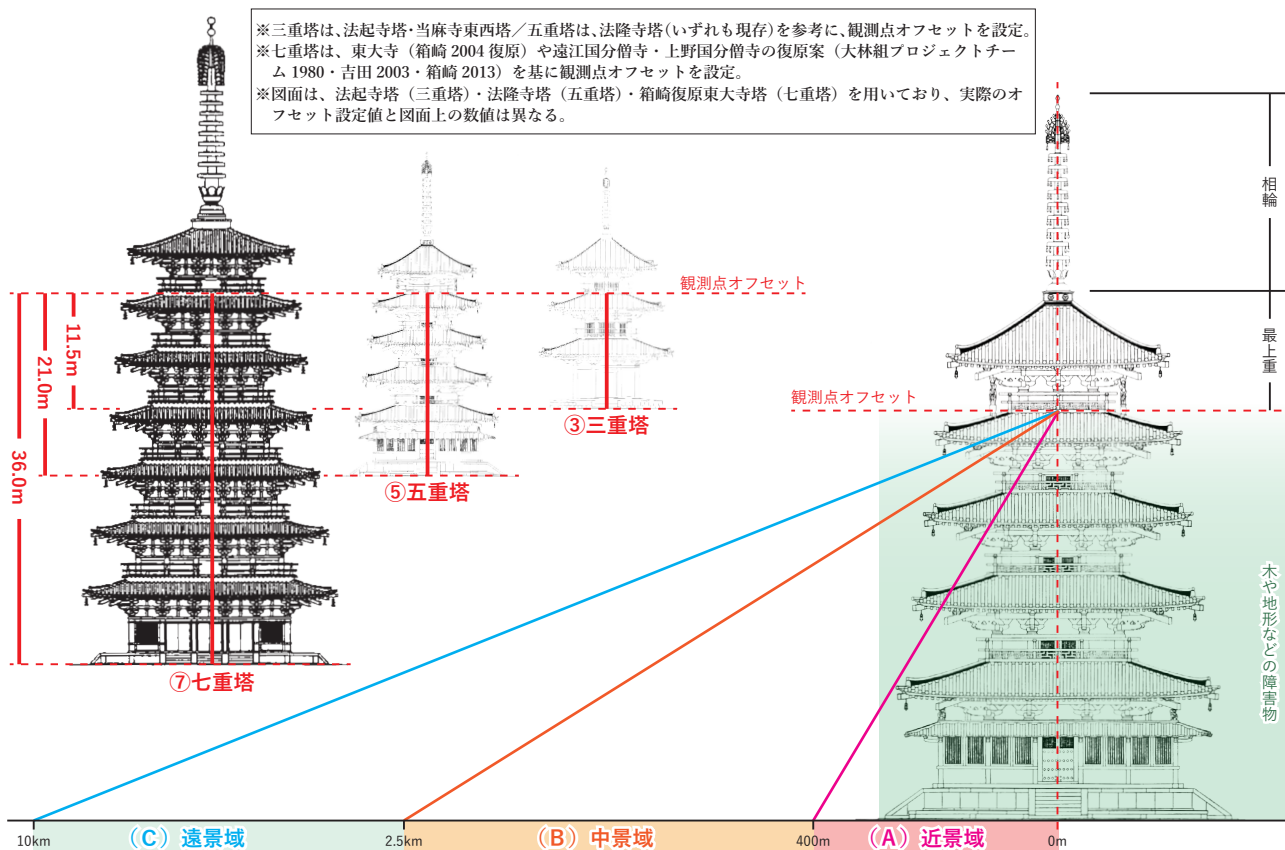
ここでは、塔の可視領域分析の手順・方法について詳細に記述する。なお解析は、Esri社 ArcGIS を用いた。

- 手順1. 国土地理院の数値標高モデル (DEM 5m) を ArcGIS にインポートする。
- 手順2. インポートした DEM のクリーニングを行う (河川や海・湖などの穴埋め・高速道路や新幹線高架、河川堤防などの平滑化)。
- 手順3. ArcGIS の Viewshed2 を用いて、各塔跡の可視領域の解析を行う。
- 手順4. 解析結果を、ベクターデータ (PDF) で書き出す。
- 手順5. 書き出した PDF データを Adobe Photoshop にインポートし、計測ログ機能を用いて面積を算出する。

以上の、作業を経て各塔跡の可視領域解析を行った。

次に、手順3の可視領域解析のパラメータについて記述する (第4図上)。本論では、塔の可視領域解析を行うため『景観用語辞典』「視距離」(伊藤 2021) に基づいて、視点場から塔までの視距離 (観測距離) を、A 近景域 (0m~400m)、B 中景域 (400m~2.5km)、C 遠景域 (2.5km~10km)、の3つに分類した。また、塔跡からは塔本体の構造を推測できないため、三重塔、五重塔、七重塔の3つの可能性を考えた。塔の認識については、「塔の最上重+相輪が視認できること」と設定し、『日本建築史基礎資料集成 11』(太田編 1983) や東大寺七重塔・各国分寺七重塔の復原 (大林組プロジェクトチーム 1980・吉田 2003・箱崎 2004・箱崎 2013) などを参考に、観測点のオフセットを③三重塔 (11.5m~)、⑤五重塔 (21m~)、⑦七重塔 (36m~) に設定した。塔1基につき、③-A、③-B、③-C、⑤-A、⑤-B、⑤-C、⑦-A、⑦-B、⑦-C の合計9回の解析を行った。

手順5では、Adobe Photoshop にインポートしたデータについて、計測ログ機能を用いて各可視領域の面積を算出し、対象の全域で塔を視認できる (可視領域に空白が無い) 状態を 100% とした場合の、可視領域の比率を算出した (第4図下)。また、塔を中心に可視領域を 45° ずつに分割し、8 方位の可視領域の比率も算出した。算出した三~七重塔の数値の平均値を、Av として集計した。本分析の対象は、塔と金堂の相対的位置関係が明らかになっている 51 寺である。可視領域解析の成果及び各 Av の表を第4表~第6表に、各寺院の



可視領域一覧表凡例(単位:%)

寺院	視距離	可視領域比率			
		北西	北	北東	東
○ ○ 寺	A (近景域)	西	北 北 西	東 東 東	南 南 南
	B (中景域)	西	北 北 西	東 東 東	南 南 南
	C (遠景域)	西	北 北 西	東 東 東	南 南 南

可視領域一覧表の例(山王廃寺)

寺院	視距離	可視領域比率			
		北西	北	北東	東
山 王 廃 寺	A	西	北 97.381 88.662 72.890	東 85.302 92.050 88.537	南 93.022 90.745 93.464
	B	西	北 72.581 67.672 64.971	東 54.053 61.789 63.742	南 42.554 54.169 71.558
	C	西	北 74.949 45.607 45.436	東 36.784 67.555 89.399	南 83.296 75.749 88.521

第4図 可視領域解析の設定と可視領域の方位ごとの算出方法

塔跡からみた国分僧寺の伽藍配置（上）

第4表 可視領域の解析結果と伽藍配置①

視 距 離	可視領域比率			伽藍配置	視 距 離	可視領域比率			伽藍配置	視 距 離	可視領域比率			伽藍配置	
穴太 廃寺	A	北	74.015	67.156	77.736	A	北	96.560	98.282	98.615	A	北	87.343	88.107	71.877
		西	75.375	83.754	87.746		西	95.630	95.542	96.810		西	89.551	86.984	71.516
		東	86.871	93.924	61.075		東	94.742	91.522	92.175		東	92.119	91.314	87.815
B	北	18.749	29.396	72.168	B	北	53.725	59.290	72.753	B	北	44.915	53.712	63.010	
	西	16.799	59.230	97.274		西	52.799	61.598	63.136		西	51.961	48.421	61.383	
	東	52.895	81.112	97.619		東	64.073	66.634	57.392		東	31.522	28.559	50.972	
C	北	0.544	3.480	71.894	C	北	41.181	56.512	59.011	C	北	20.604	21.780	5.650	
	西	0.133	30.664	90.499		西	80.388	66.247	68.731		西	27.938	15.314	21.248	
	東	3.640	44.725	84.535		東	69.658	73.677	80.064		東	7.606	1.348	23.252	
北野 廃寺	A	北	88.565	91.604	94.547	A	北	81.470	74.764	58.687	A	北	27.795	26.268	34.557
		西	100.000	87.255	69.072		西	48.538	64.935	54.827		西	27.365	49.057	63.838
		東	87.426	82.720	71.932		東	55.980	49.024	71.946		東	55.632	59.853	80.679
B	北	65.565	52.045	60.431	B	北	38.771	41.913	43.721	B	北	2.887	0.006	11.600	
	西	55.080	61.389	70.628		西	48.490	43.028	42.622		西	8.866	11.729	37.137	
	東	56.908	61.434	71.372		東	44.568	51.314	30.912		東	22.346	9.611	0.898	
C	北	16.951	28.307	16.320	C	北	26.669	55.155	48.703	C	北	0.343	0.090	1.357	
	西	65.098	36.465	14.435		西	27.996	40.333	33.023		西	1.565	1.369	4.393	
	東	74.375	58.768	17.149		東	43.470	55.897	32.560		東	1.507	1.672	0.000	
額田 廃寺	A	北	55.521	51.551	56.507	A	北	53.133	62.505	59.062	A	北	95.285	92.050	94.799
		西	60.894	69.166	76.139		西	74.084	66.458	70.113		西	98.544	96.040	96.644
		東	67.656	81.262	95.937		東	79.138	73.987	43.387		東	98.225	96.408	96.366
B	北	14.029	4.798	1.982	B	北	42.732	19.772	25.030	B	北	59.678	63.982	67.621	
	西	58.123	32.672	30.767		西	25.646	27.080	23.681		西	67.063	66.886	59.320	
	東	59.814	42.506	48.246		東	31.264	23.871	23.891		東	70.855	66.395	76.901	
C	北	10.289	1.064	0.000	C	北	60.014	67.318	47.482	C	北	3.402	12.119	54.163	
	西	33.129	9.108	16.109		西	57.723	45.960	18.469		西	14.273	41.720	64.212	
	東	1.191	0.016	11.002		東	46.524	28.061	13.856		東	66.097	64.060	54.917	
崇福 寺	A	北	41.332	37.528	31.600	A	北	91.423	89.953	92.008	A	北	98.225	96.921	93.383
		西	42.512	42.429	19.979		西	91.062	94.656	93.036		西	96.463	96.886	97.213
		東	34.904	59.187	61.575		東	92.756	93.008	97.878		東	96.255	98.169	98.461
B	北	0.790	3.496	0.000	B	北	52.580	43.044	49.198	B	北	55.725	59.863	67.850	
	西	1.672	8.225	2.764		西	57.454	51.438	47.269		西	60.512	58.696	37.014	
	東	0.239	1.797	54.887		東	51.896	54.023	53.972		東	65.827	61.184	59.207	
C	北	0.000	0.000	0.000	C	北	50.750	82.099	73.694	C	北	33.373	52.906	73.079	
	西	2.425	11.588	9.482		西	56.227	68.842	76.565		西	11.188	51.998	80.006	
	東	0.000	0.872	82.279		東	69.720	80.078	55.669		東	45.876	66.084	52.953	
山王 廃寺	A	北	97.381	85.302	93.022	A	北	87.676	95.380	85.302	A	北	87.510	81.720	84.969
		西	88.662	92.050	90.745		西	91.133	92.567	96.465		西	87.371	91.935	91.161
		東	72.890	88.537	93.464		東	82.914	88.732	94.396		東	92.133	96.366	91.328
B	北	72.581	54.053	42.554	B	北	49.351	51.241	71.156	B	北	66.799	43.381	33.967	
	西	67.672	61.789	54.169		西	52.304	45.769	67.198		西	61.778	39.804	37.585	
	東	64.971	63.742	71.558		東	26.827	19.337	27.370		東	24.022	7.622	41.594	
C	北	74.949	36.784	83.296	C	北	66.633	68.530	55.727	C	北	79.940	60.628	55.006	
	西	45.607	67.555	75.749		西	42.746	43.068	44.514		西	53.641	44.755	59.798	
	東	45.436	89.399	88.521		東	39.540	16.774	9.797		東	6.069	0.201	42.429	
衣川 廃寺	A	北	31.391	69.752	84.275	A	北	63.519	70.294	80.637	A	北	11.996	55.022	79.943
		西	46.594	68.898	98.461		西	62.935	82.635	90.870		西	29.225	64.940	72.682
		東	40.888	69.086	94.813		東	88.926	94.118	93.494		東	77.513	87.926	85.622
B	北	6.415	19.386	75.421	B	北	15.716	36.442	81.217	B	北	17.355	42.939	32.396	
	西	12.431	48.685	92.582		西	6.361	50.245	94.665		西	11.818	31.093	52.774	
	東	11.925	72.483	97.364		東	14.560	61.168	90.364		東	14.878	41.344	34.037	
C	北	10.754	16.751	93.243	C	北	0.602	1.199	76.047	C	北	6.993	17.950	38.275	
	西	9.374	48.538	71.559		西	0.000	30.952	89.578		西	0.344	22.825	50.344	
	東	9.280	84.775	92.218		東	0.083	10.109	69.845		東	7.399	12.259	48.852	

第5表 可視領域の解析結果と伽藍配置②

寺院距離	可視領域比率	伽藍配置	寺院距離	可視領域比率	伽藍配置	寺院距離	可視領域比率	伽藍配置
九十九坊廃寺	北 94.007 88.482 78.388 94.965 91.899 85.469 89.176 88.676 98.074	法隆寺式 	木下別所廃寺	北 96.866 94.868 77.999 77.569 89.455 73.071 85.399 89.620 94.063	法起寺式 	結城廃寺	北 97.032 94.438 89.773 96.604 96.906 93.438 92.716 88.148 94.216	法起寺式
	南 18.267 1.289 0.306 52.322 24.276 8.191 70.445 25.757 16.564			南 36.531 26.900 21.745 45.223 39.316 41.503 49.682 46.321 44.788			南 67.384 54.009 53.527 62.638 61.913 65.791 63.945 62.451 62.639	
	西 0.152 0.000 0.000 43.861 9.299 0.000 7.459 13.995 8.878			西 46.677 31.001 24.760 38.536 34.710 21.261 43.094 30.177 20.842			西 70.518 68.108 49.343 61.770 62.022 49.177 57.800 72.359 64.044	
借宿廃寺	北 87.926 73.390 86.954 94.202 92.284 92.661 93.744 92.133 88.856	法隆寺式 	杉崎廃寺	北 69.377 49.038 70.002 77.749 81.016 85.969 88.856 92.050 98.891	法起寺式 	正家廃寺	北 52.731 67.531 66.753 58.090 58.650 38.764 37.792 62.394 64.851	法隆寺式
	南 50.964 34.224 42.769 50.873 34.767 32.172 29.630 20.603 14.968			南 9.017 4.044 2.534 37.569 23.685 12.443 32.742 50.290 40.128			南 31.005 68.056 49.731 2.232 33.030 60.604 13.135 12.655 25.627	
	西 7.216 0.090 16.840 7.180 6.216 17.795 0.403 0.114 0.024			西 1.728 0.430 0.000 11.156 7.804 2.499 26.588 0.675 19.309			西 20.457 10.896 1.093 1.352 4.787 4.247 0.005 0.000 0.216	
夏見廃寺	北 30.170 64.352 62.949 48.802 59.529 63.435 63.269 65.865 37.431	特殊 	新治廃寺(東塔)	北 85.538 98.947 96.685 87.232 94.082 98.363 85.150 84.094 95.283	特殊 	内裏野丘陵伽藍(甲賀寺)	北 71.307 67.309 56.646 55.410 69.737 47.052 72.182 92.550 69.863	回廊外西に塔
	南 25.804 15.353 1.844 27.896 17.853 4.403 36.877 16.717 14.603			南 71.134 62.787 51.054 85.322 68.270 54.094 81.062 76.867 60.738			南 24.451 22.618 10.967 23.956 20.482 9.763 20.393 31.011 20.064	
	西 3.984 7.212 1.221 7.324 5.135 3.622 11.544 1.639 4.684			西 51.425 4.896 19.060 48.099 42.648 20.142 62.631 73.976 60.526			西 3.447 4.089 0.446 0.365 1.235 0.000 1.445 1.750 0.000	
夏井廃寺	北 76.528 95.104 93.882 44.206 67.538 86.899 20.062 60.964 39.972	観世音寺式 	新治廃寺(西塔)	北 78.846 97.891 98.155 90.648 94.943 99.085 88.301 86.774 97.421	特殊 	伊賀国分僧寺	北 77.111 74.570 88.371 71.418 85.002 90.273 79.513 82.109 93.285	回廊外東に塔
	南 15.055 53.240 51.027 0.132 29.926 83.459 1.310 1.837 31.850			南 72.398 55.583 51.393 84.967 68.871 55.291 81.105 78.151 61.680			南 48.883 52.680 42.468 48.001 40.207 37.338 38.235 27.283 24.370	
	西 5.017 29.176 89.632 0.000 34.553 99.721 0.000 0.000 52.620			西 52.055 4.881 18.921 48.059 42.777 20.382 62.790 73.943 60.764			西 28.785 16.376 1.771 12.057 12.147 2.009 10.250 9.750 15.851	
大内廃寺	北 95.729 100.000 96.812 91.356 94.520 96.062 88.968 93.785 93.452	法隆寺式 	竹林寺廃寺	北 81.928 67.932 78.331 75.415 72.142 68.780 69.322 67.378 55.244	不明 	伊豆国分僧寺	北 92.284 91.966 91.036 85.219 91.891 93.480 89.773 98.433 92.938	金堂前西に塔
	南 81.486 83.715 75.604 77.111 77.079 71.194 76.874 74.552 72.598			南 42.876 47.464 64.535 33.024 44.306 72.789 25.584 26.506 41.288			南 40.372 40.629 37.565 38.248 47.408 49.042 48.401 61.646 61.703	
	西 29.082 78.773 48.148 18.016 42.489 31.125 38.423 69.743 26.088			西 12.788 27.054 56.190 25.958 31.261 52.630 28.302 23.339 23.589			西 37.025 19.893 23.703 43.309 30.430 19.301 28.031 21.896 50.044	
郡山廃寺	北 95.285 95.299 96.310 97.838 94.814 92.466 96.007 94.160 91.147	観世音寺式 	多賀城廃寺	北 69.863 59.923 81.734 75.500 80.769 89.981 79.068 82.886 80.637	観世音寺式 	尾張国分僧寺	北 93.825 94.269 93.950 91.673 92.696 91.147 90.370 94.603 91.730	回廊外東に塔
	南 75.528 60.794 57.466 66.761 62.013 59.852 57.654 57.429 57.595			南 26.763 21.504 21.134 82.663 49.814 31.444 79.818 68.183 64.812			南 45.445 56.041 49.477 33.081 51.176 56.556 44.961 54.155 53.124	
	西 3.672 28.552 75.635 21.270 44.872 77.276 29.531 59.833 62.691			西 9.766 5.048 22.955 42.024 46.373 19.343 91.325 84.568 90.782			西 45.870 84.582 82.444 41.589 65.535 68.975 59.043 75.623 63.425	

第6表 可視領域の解析結果と伽藍配置③

寺院距離	可視領域比率	伽藍配置	寺院距離	可視領域比率	伽藍配置	寺院距離	可視領域比率	伽藍配置
甲斐国分僧寺	北 91.883 93.966 93.410 84.483 89.511 92.730 88.676 84.497 86.441	金堂前東に塔 	A	北 89.745 90.800 61.242 73.196 76.606 66.601 76.903 72.612 56.924	法隆寺式 	A	北 93.173 87.676 80.679 90.398 89.190 82.512 97.392 83.678 77.027	回廊外東に塔
	南 65.366 67.274 62.268 51.347 53.003 59.177 24.724 34.791 56.615			北 36.175 45.370 62.619 27.640 54.131 53.158 58.787 70.818 75.937			北 48.884 50.790 45.889 25.458 39.258 44.751 33.716 26.069 36.450	
	南 48.207 68.655 60.351 86.430 42.717 9.242 38.264 15.808 14.267			北 43.287 21.517 46.784 72.240 55.881 45.717 76.042 85.362 55.514			北 20.916 53.068 52.842 20.135 37.567 37.075 38.293 52.434 25.340	
上総国分僧寺	北 67.114 89.814 88.482 58.159 84.101 93.619 62.866 91.258 94.757	金堂前東に塔 	A	北 94.243 87.093 90.481 82.220 89.068 90.064 82.220 77.277 80.485	回廊外東に塔 	A	北 85.316 95.380 90.495 83.928 91.691 87.926 89.926 90.453 93.855	回廊外西に塔
	南 75.967 53.138 36.982 72.113 55.549 40.189 66.358 59.136 38.073			北 54.931 51.586 62.596 60.041 57.895 65.532 48.356 49.414 68.170			北 31.454 34.963 20.687 46.301 49.623 71.145 54.285 65.894 70.821	
	南 97.706 91.063 30.316 95.004 50.164 18.787 19.105 28.650 20.137			北 81.053 74.734 61.325 86.076 68.942 38.185 85.960 71.258 52.167			北 2.267 3.949 6.579 4.057 28.556 38.696 51.606 68.459 52.675	
上野国分僧寺	北 95.575 95.158 93.535 87.551 94.702 95.201 81.165 93.036 91.328	回廊外西に塔 	A	北 86.149 88.773 85.038 84.913 82.897 67.267 87.510 89.648 57.701	回廊外東に塔 	A	北 87.982 80.054 83.331 94.478 93.068 95.144 94.811 95.047 95.616	金堂前東に塔
	南 74.135 59.950 57.561 59.921 63.208 67.783 51.168 65.594 66.567			北 73.693 39.144 7.445 69.466 37.993 7.004 67.894 35.700 3.694			北 11.052 3.324 31.983 18.044 32.338 47.887 39.249 48.350 57.396	
	南 72.512 30.695 79.134 36.339 65.137 77.762 47.933 86.201 89.849			北 15.920 23.870 0.013 32.720 29.397 0.000 71.747 83.767 6.943			北 7.366 0.351 0.327 22.335 24.335 41.405 16.980 45.597 60.125	
相模国分僧寺	北 74.626 91.980 91.772 89.106 83.457 67.101 89.870 87.065 49.621	法隆寺式 	A	北 92.216 87.843 51.565 86.843 81.496 60.714 78.777 89.884 85.316	回廊外西に塔 	A	北 93.133 91.298 90.550 96.463 97.850 98.294 99.044 97.227 96.852	回廊外東に塔
	南 59.332 46.081 14.049 67.709 41.566 11.659 79.945 34.529 17.291			北 28.732 33.833 50.584 32.911 42.006 40.085 50.406 64.850 61.922			北 38.467 40.138 42.360 39.405 56.870 74.653 74.615 70.507 72.056	
	南 50.574 29.966 8.035 33.595 28.040 4.201 53.663 30.400 13.578			北 31.596 21.747 6.997 68.955 47.299 37.594 55.124 82.502 73.541			北 68.524 41.249 49.745 63.214 53.181 80.224 36.298 24.278 61.347	
信濃国分僧寺	北 88.981 83.122 77.680 74.167 84.599 80.040 85.386 91.675 79.624	回廊外東に塔 	A	北 84.344 92.563 85.913 82.498 91.668 82.512 92.839 94.077 96.394	金堂前東に塔 	A	北 69.863 59.909 81.762 75.500 80.767 89.981 79.013 82.886 80.651	回廊外東に塔
	南 36.228 19.957 9.403 30.578 21.425 19.042 15.176 11.090 25.833			北 33.911 43.066 13.648 25.300 29.383 19.066 40.739 46.348 11.716			北 26.763 21.504 21.134 82.663 49.814 31.444 79.818 68.183 64.812	
	南 36.188 16.101 21.679 5.607 15.443 28.102 0.000 0.000 15.762			北 4.049 6.863 3.022 7.893 4.764 2.017 2.702 8.251 3.239			北 9.766 5.048 27.639 42.024 46.373 19.343 91.325 84.568 61.817	

※各寺院の塔について三重塔・五重塔・七重塔の可能性を想定し、Esri社 Arc-GISを用いて可視領域解析を行った。それぞれ8方位に分割し面積比を求めたのち、3つの平均値を求め、方位ごとに表で示した。

※各寺院について、視距離（A：近景域、B：中景域、C：遠景域）ごとに可視領域の面積比を表記した。特に全方位の比率（中央）より高い数値のものはトーンを入れ、方位による偏差を視覚的に表現した。

※各報告書情報などから、伽藍配置の模式図を復元した。国分僧寺の伽藍配置については、分類が統一されていない現状を踏まえて型式名を示さずに塔の位置を表記した。

伽藍配置と共におおよその創建年代順に示した。可視領域の解析成果は左から三重塔・五重塔・七重塔の順で示した。表は上から A、B、C の順で示し、全方位の比率より高いものをトーンで示した。

(2) 塔の可視領域分析

以下、算出した各塔跡の可視領域解析の平均値 A_v を基に分析結果を記述する。

全体を通して、A の可視領域の比率は B と C に比べて高く、B や C よりも A が低いものは見られない。一方、B の可視領域の比率は C よりも高いものもあれば低いものも見られる。つまりほぼ全ての寺院では、近景域で塔が視認できるが、中景域・遠景域については寺院によって意識が異なることが分かる。よってここでは B と C を比較して、可視領域の比率が高い方を中心に分析結果を述べる。

穴太廃寺を見ると、C の可視領域が 30.664% であるのに対し、B は 59.230% と比率が高くなっている。また、B は東に可視領域の偏差が見られるため、穴太廃寺は中景域の東部に可視領域の偏差があることが分かる。また穴太廃寺は法起寺式伽藍配置のため、東に塔が配置される。このように伽藍配置における塔の位置と可視領域の偏差の方位が一致するものについては、可視領域と伽藍配置が「連動」しているといえる。

法起寺式伽藍配置の 10 寺（穴太廃寺、山王廃寺、龍角寺、東畑廃寺、美濃弥勒寺、寺本廃寺、天花寺廃寺、木下別所廃寺、杉崎廃寺、結城廃寺）のうち、龍角寺、木下別所廃寺、杉崎廃寺、結城廃寺の 4 寺以外は塔の位置する方位（東）に可視領域の偏差が認められた。また、法隆寺式伽藍配置の 6 寺（額田廃寺、茨城廃寺、九十九坊廃寺、借宿廃寺、大内廃寺、正家廃寺）のうち、正家廃寺を除いたすべての寺院で塔の位置する方位（西）に可視領域の偏差が認められた。

川原寺式伽藍配置、観世音寺式伽藍配置の 4 寺（南滋賀町廃寺、夏井廃寺、郡山廃寺、多賀城廃寺）のうち、南滋賀町廃寺や夏井廃寺では可視領域の連動が見られたが、郡山廃寺、多賀城廃寺では見られなかった。また、そのほか特殊な伽藍配置を持つ寺院や、伽藍配置が不確定な 9 寺（崇福寺、衣川廃寺、上植木廃寺、寺領廃寺、宮井廃寺、台渡里廃寺、法堂寺、夏見廃寺、竹林寺廃寺）では、宮井廃寺、台渡里廃寺、夏見廃寺の 3 寺以外の寺院で可視領域の偏差と塔の位置の連動が見られた。

国分僧寺においては、回廊内に塔を配置する 8 寺（伊豆、甲斐、相模、上総、下総、常陸、美濃、飛騨）のうち、伊豆、上総、飛騨以外の 5 寺で可視領域と塔の連動が見られた。また回廊外に塔を配する 12 寺（伊賀、尾張、三河、遠江、駿河、常陸、近江、信濃、上野、武蔵、下野、陸奥）では、尾張、常陸、近江、武蔵の 4 寺にのみ可視領域と塔の連動が見られた。

(3) 小結

以上の分析から、次のようなことが言える。

国分僧寺以前の伽藍配置のうち法起寺式伽藍配置、法隆寺式伽藍配置では塔の配置する方位（法起寺式は東、法隆寺式は西）に可視領域の偏りがある（伽藍配置と可視領域が連動する）寺院が多く見られ、特に法隆寺式伽藍配置では顕著である。国分僧寺以前の寺院では、全体的に可視領域の偏差と塔の位置する方位との相関関係が見て取れるが、創建年代が下るにつれて徐々に両者の連動が見られなくなる傾向にある。国分僧寺では、所謂法隆寺式伽藍配置をとる下総、相模国分僧寺を中心に、回廊内に塔を配置する伽藍の国分僧寺で可視領域の連動が多く見られるが、回廊外に塔を置く伽藍では可視領域の連動はあまり見られない。

第 4 章 東山道・東海道国分僧寺の伽藍配置の成立

第 1 節 東山道・東海道における塔跡の変遷とその背景

第 3 章の分析を基に、古代東山道・東海道の塔跡の変遷についてまとめる。

①当該地域の心礎は通時的に様々な型式がみられるが、各心礎の部位を径と深さ（高さ）で 3 つに分類し、整理することで変遷と展開を追うことができた。心礎は、国分僧寺以前の寺院では舍利孔や舍利孔に近いサイズの部位（C）が見られるが、各国分僧寺の心礎には見られない。また、柱座・柄穴・舍利孔が混在しているであろう（B）では、国分僧寺で出柄が出現する。他にも、国分僧寺では無段の心礎等が見られる。このこと

から、国分僧寺で心礎は規模が大きくなるものの、簡素化し、舍利埋納の機能を失う。

②当該地域の塔基壇の規模は、国分僧寺以前と比べると国分僧寺で格段に大きくなる。また、国分僧寺以前の塔では基壇規模の統一性が見られないが、国分僧寺の塔基壇は一定の規格性が見て取れ、その一辺長から4つに分類できる。基壇化粧は、国分僧寺以前では近江の崇福寺や観世音寺式伽藍配置の多賀城廃寺でのみ確認されている切石積基壇が、国分僧寺でいくつか見られる。つまり、国分僧寺以前では統一性のなかった塔基壇は、国分僧寺の建立に伴ってある程度規格化された。

③当該地域の塔の柱間は国分僧寺以前で、総間が大きくても7.2m程度だが国分僧寺では9mを超え、規模が大きくなる。各柱間も国分僧寺以前では2m前後であるが、国分僧寺の塔は、約3m、3.3m、3.6m前後の等間の2つに分類できる。基壇規模は国分僧寺以前であまり規格性がみられないものの、柱間は規格がある程度寺院間で共有されていた。

④可視領域の分析から、国分僧寺以前では見られるということの意識と伽藍配置の連動が顕著であった塔は時代が下るにつれて徐々にその性質を失っていく傾向にある。

以上をまとめると、次の通りである。①心礎は、通時的に共通点が少ないが舍利孔を失う方向で変遷する。②基壇は、国分僧寺で規格化される。③柱間は、通時的に規格性が高い。④可視領域と塔の平面的な位置の連動は、国分僧寺ではそれ以前と比べると少ない。

心礎は塔の心柱と相輪を受けるための礎石であり、舍利埋納機能を有した遺構であるが、国分僧寺の心礎ではその機能が失われる。また、国分僧寺で基壇規模が大きくなることや、規格化することなどを考慮すると、東山道・東海道の国分僧寺では、塔は重要な位置を占めていたが、従前とは異なる造塔思想によって建立されたと考えられる。

第2節 塔跡からみた東山道・東海道国分僧寺の伽藍配置

第3章で心礎について、国分僧寺以前には多く存在した舍利孔が国分僧寺では無くなることを示した。また、国分僧寺以前の多くの寺院で可視領域と伽藍配置が連動することも示した。つまり国分僧寺以前の伽藍は、塔が「見られる」という事への意識≒モニュメント的性質が強い。しかしその一方で、国分僧寺では一部可視領域の連動がみられたが、全体的にその性質は低い。こうした造塔意識の変化は、伽藍配置にも大きく影響を及ぼした。

国分僧寺以前の伽藍配置には、法起寺式伽藍配置や法隆寺式伽藍配置を中心に四天王寺式、川原寺式、観世音寺式伽藍配置などがあげられる。いずれも舍利信仰を起源とする塔と仏像を安置した金堂を配置し、回廊でそれを囲う伽藍配置である。その他の特殊な伽藍配置でも、金堂と塔のいずれかが回廊の外に配置されることはなく、両堂塔は回廊内で有機的な関係を保っている。一方、国分僧寺の伽藍配置は、「法隆寺式伽藍配置」や「大官大寺式伽藍配置」、回廊外に塔が配置される伽藍配置があげられる。「法隆寺式伽藍配置」は従来と同様、回廊内に金堂と塔が配される。「大官大寺式伽藍配置」も塔が回廊内に配置されるが、金堂が回廊に接続する。

国分僧寺の造塔の意義は、詔に記される通り金字の『金光明最勝王経』を納める為であり、また天皇権威の象徴であると考えられてきた（田村1981、本郷1997、須田2011）。本章第1節の考察を踏まえると、国分僧寺の建立において、造塔はかなり重要視されていたと推測できる。更に日本古代の伽藍配置について、律令国家の成立に伴い、伽藍の「金堂前面の儀礼空間」が拡張する方向で伽藍配置が変遷していくことが従来から指摘されており（上原1986）、筆者もその現象を定量的な分析を通して証明した（高橋2022）。つまり、「金堂前面の儀礼空間」を確保する意識と造塔の重要性が重なった結果、従来の塔と金堂の関係が変容し、国分僧寺では「大官大寺式伽藍配置」や、回廊外に塔が置かれる伽藍配置、陸奥国分僧寺のような塔院（塔のみを回廊で囲った空間）をもつ伽藍が成立したと考えられる。

おわりに

本論では、東海道・東山道の国分僧寺象に、塔跡の分析を通して国分僧寺の伽藍配置の成立背景を探った。

国分僧寺の創建は、段階的であるが（須田 2013、川尻 2013）、全国で一律に実施された大事業であった。しかし、その伽藍配置が多様であることは、律令社会の実態を紐解く上で重要な手掛かりとなる。本稿では、東山道・東海道を焦点をあてたが、他地域の分析結果も別稿としてまとめる予定である。本稿を基軸に、国分僧寺の伽藍配置成立の背景をより普遍的に論及するため、分析対象や視点を広げることが今後の課題である。

引用文献

- 朝日町教育委員会 1988 『繩生廃寺跡発掘調査報告』
- 足立 康 1933 『岩波講座日本歴史第3巻9 飛鳥奈良時代の佛教建築』岩波書店
- 網 伸也 2014 「国分寺の伽藍配置」『季刊考古学』129 雄山閣 pp.56-59
- 有賀裕史 2013 「国分寺の回廊形式と伽藍配置」『半田山地理考古』1 岡山理科大学生物地球学部生物地球学科地理考古学研究室 pp.41-51
- 安城市教育委員会 2004 『寺領廃寺』
- 井内 潔 1965 「初期伽藍配置形式の変遷について」『史迹と美術』360 史迹美術同致會 pp.384-401
- 石田茂作 1929 「法起寺伽藍に就いて」『考古学雑誌』19-6 考古學會 pp.374-389
- 石田茂作 1950 「飛鳥奈良時代 第1章 遺跡」原田淑人編『日本考古学入門』吉川弘文館 pp.180-191
- 石田茂作 1959 『東大寺と国分寺』至文堂
- 伊東忠太 1893 「法隆寺建築論」『建築雑誌』83 日本建築学会 pp.317-350
- 伊東忠太 1912 「日本帝國美術略史 建築之部」東京帝室博物館編『稿本日本帝國美術略史』隆文館 pp.323-354
- 伊藤 登 2021 「視距離」篠原 修編『景観用語辞典 増補改訂第2版』彰国社 pp.44-45
- 上原真人 1986 「8. 仏教」『岩波講座 日本考古学4』岩波書店 pp.308-366
- 太田博太郎 1979 「南都六宗寺院の建築構成」『日本古寺美術全集』第2巻 集英社 pp.
- 太田博太郎編 1983 『日本建築史基礎資料集成 11』中央公論美術出版
- 大林組プロジェクトチーム 1980 「遠江国分寺復元」『季刊大林』8 大林組広報室 pp.3-12
- 小笠原好彦 1989 「第三章 近江古代寺院の伽藍・基壇と寺域」小笠原好彦・田中勝弘・西田 弘・林 博通『近江の古代寺院』真陽社 pp.47-58
- 小笠原好彦 2011 「本薬師寺の造営と新羅の感恩寺」『日本古代学』3 明治大学日本古代学教育・研究センター pp.27-40
- 梶原義実 2017 『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館
- 川尻秋生 2013 「国分寺造営の諸段階—文献史学から—」須田勉・佐藤信編『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館 pp.45-63
- 春日居町教育委員会 1988 『寺本廃寺』
- 小谷徳彦 2012 「内裏野地区の変遷—甲賀寺から近江国分寺へ—」『帝塚山大学考古学研究所研究報告 X IV』 pp.65-84
- 斎藤 忠 1972 「国分僧寺跡・尼寺跡の研究の課題」『日本歴史』288 日本歴史学会 pp.106-122
- 坂詰秀一 1971 「東国・国分僧寺の伽藍配置」『シンポジウム 仏教考古学序説』雄山閣出版 pp.127-141
- 佐川正敏 2010 「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔基礎設置・舍利奉安形式の系譜」鈴木靖民『古代東アジアの仏教と王権』勉誠出版 pp.159-201
- 佐川正敏 2020 「東アジアにおける古代仏教寺院研究の考古学的新展開」『アジア流域文化研究』XI 東北学院大学アジア流域文化研究所 pp.9-25
- 貞清世里・高倉洋彰 2010 「鎮護国家の伽藍配置」『日本考古学』30 日本考古学協会 pp.21-45
- 貞清世里 2020a 「法起寺式伽藍配置をとる古代寺院の集成」『西南学院大学博物館研究紀要』第8号 pp.51-72
- 貞清世里 2020b 「古代寺院伽藍配置の意義—観世音寺式・法起寺式伽藍配置をとる寺院とその展開—」西南学院大学博士学位請求論文 甲第 51 号
- 佐藤 信・須田 勉編 2011 『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館
- 佐藤 信・須田 勉編 2013 『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館
- 滋賀県教育委員会 2009 『史跡紫香楽宮跡（内裏野丘陵地区）』
- 静岡市教育委員会 2016 『史跡片山廃寺発掘調査報告書（主要遺構調査編）』
- 清水昭博 2006 「朝鮮半島における伽藍配置」『考古学ジャーナル』545 ニューサイエンス pp.14-19
- 鈴木和雄 1989 「寺領廃寺発掘調査報告抜粋」『安城市教育委員会』15 安城市歴史博物館
- 須田 勉 2011 「国分寺と七重塔」須田勉・佐藤信編『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館 pp.144-168
- 須田 勉 2013 「国分寺造営の諸段階—考古学から—」須田勉・佐藤信編『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館 pp.2-44
- 須田 勉 2016 『国分寺の誕生 古代日本の国家プロジェクト』吉川弘文館
- 須田 勉 2020 「国分寺の伽藍配置」『史跡甲斐国分寺跡 - 史跡整備のための伽藍中枢部の遺構確認調査報告書 -』
- 高橋健自 1904a 「古刹の遺址（圖入）」『考古界』4-1 考古學會 pp.20-25
- 高橋健自 1904b 「古刹の遺址（承前）（圖入）」『考古界』4-3 考古學會 pp.12-15
- 高橋健自 1904c 「古刹の遺址（承前）（圖入）」『考古界』4-5 考古學會 pp.4-10
- 高橋健自 1905 「飛鳥京古刹の堂塔配置の三様式」『宗教界』宗教界發行所 pp.24-30

- 高橋健自 1907 「古刹の遺址」『考古界』6-7 考古學會 pp.14-20
- 高橋 亘 2022 「関東・東北古代寺院の伽藍配置とその展開—「金堂前面の儀礼空間」の分析から—」『溯航』40 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会 pp.29-45
- 武田和哉編 2022 「日本古代における寺院造営・伽藍配置研究史の概観」『ユーラシア東方世界の都城と仏塔』大谷大学真宗総合研究所 pp.1-15
- 田中重久 1944 「伽藍配置の研究」『聖徳太子御聖蹟の研究』全国書房 pp.506-543
- 田村圓澄 1981 「国分寺創建考」『南都佛教』46 南都佛教研究会 pp.55-82
- 辻善之助 1919 「国分寺考」『日本佛教史之研究』金港堂書籍 pp.1-48
- 角田文衛 1938 「国分寺の寺院組織」角田文衛編『国分寺の研究 上巻』考古学研究会 pp.181-312
- 角田文衛編 1938a 『国分寺の研究 上巻』考古学研究会
- 角田文衛編 1938b 『国分寺の研究 下巻』考古学研究会
- 角田文衛編 1986 『新修 国分寺の研究』吉川弘文館
- 中村太一 1996 「計画道路形成に関する対外的契機—中華思想と道路の整備—」『日本古代国家と計画道路』吉川弘文館 pp.45-49
- 奈良国立文化財研究所 1958 『飛鳥寺発掘調査報告』
- 奈良国立文化財研究所 1960 『弘福寺 川原寺発掘調査報告』
- 箱崎和久 2004 「東大寺七重塔考」『東大寺創建前後』GBS 実行委員会 pp.37-55
- 箱崎和久 2013 「七重塔の構造と意匠」須田 勉・佐藤 信『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館 pp.97-137
- 長谷川輝雄 1925 「四天王寺建築論」『建築雑誌』477 建築学会 pp.1-38
- 畑中英二 2010 「天平 17 年以降の甲賀寺—近江国分寺との関わりを中心に—」『日本考古学』29 日本考古学協会 pp.103-120
- 菱田哲郎 2005 「古代日本における仏教の普及—仏法僧の交易をめぐる—」『考古学研究』52-3 考古学研究会 pp.29-44
- 本郷真紹 1997 「古代寺院の機能」大山喬平教授退官記念会編『日本国家の史的特質 古代・中世』思文閣出版
- 三舟隆之 2017 「古代地方寺院の造営計画・技術の伝播」『考古学ジャーナル』705 ニューサイエンス社 pp.34-36
- 宮本長二郎 1990 「飛鳥時代の建築と仏教伽藍」『日本美術全集 第 2 巻 法隆寺から薬師寺へ』講談社 pp.155-163
- 向井祐介 2020 『中国初期仏塔の研究』臨川書店
- 村田治郎 1960 「初期伽藍配置の展開過程」『史迹と美術』306 史迹美術同友会 pp.242-251
- 村田治郎 1970 「初期伽藍配置の問題とその後」『史迹と美術』408 史迹美術同友会 pp.286-293
- 森 郁夫 1991 「わが国古代寺院の伽藍配置」『京都国立博物館学叢』13 京都国立博物館 pp.19-35
- 森 郁夫 1998 『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局
- 森 郁夫 2006 「古代寺院における伽藍配置と仏教観」『考古学ジャーナル』545 ニューサイエンス pp.3-7
- 山路直充 2011 「寺の空間構成と国分寺—寺院地・伽藍地・附属地—」須田勉・佐藤信編『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館 pp.196-229
- 吉田一彦 2011 「国分寺国分尼寺の思想」須田勉・佐藤信編『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館 pp.2-28
- 吉田 実 2003 「上野国分寺七重塔復元模型」『史迹と美術』73 (3) 史迹美術同友会 pp.105-115
- 吉村武彦 2017 「王権と交通」『日本古代の道路と景観 駅家・官衙・寺』八木書店 pp.514-519

図表出典一覧

第 1 図 Esri 社 Arc-GIS を用いて、筆者作成。

第 2 図～第 3 図 各種報告書記載情報を基に、筆者作成。

第 4 図 太田 1983; p113・p185 掲載図、箱崎 2006; p122 図、Esri 社 Arc-GIS を用いた可視領域解析成果を用いて筆者作成。

第 1 表～第 3 表 各種報告書記載情報を基に、筆者作成。

第 4 表～第 6 表 Esri 社 Arc-GIS を用いた可視領域解析成果を用いて、筆者作成。